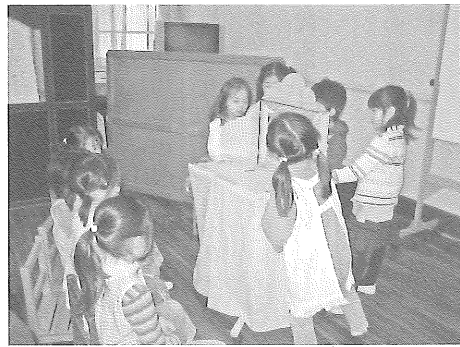


保育の現場から

## 五歳児の三学期

く ゆっくりと表現を楽しむく

上坂元絵里



▲紙芝居劇場：読み手とめくり役が協力

### 五歳の四月に出会った子どもたち

海の組の子どもたちには、彼らが五歳の四月に、私は担任として出会いました。五歳から担任をするのは初めてで、今までの暮らし方を子どもたちから伝えてもらいながらのスタートでした。

一学期、子どもたちは幼稚園で一番大きい組に

なったりれしきでいっぱいでした。手をつないで新入園の三歳児を遊戯室へエスコートしたり、降園前の片づけや身支度の手伝いに行く子どももいました。

園庭の竹やぶで見つけたタケノコでスープを作って小さい組にもごちそうしたり、野菜の苗を植えて育てたり、園外の農園に出かけてジャガイモ掘りをしたり、春から夏の季節を楽しみながら、いろいろ

な体験をしました。

二学期、クラスで力を合わせて綱引き、隣のクラスと混合チームでバトンをつないでリレーなどをしました。十月の運動会では、ひと回りたくましさを増しました。「前の大きい組みたいに、小さい組のために何かやってあげたいね」というY君の提案から、みんなで何度も相談しながら、五歳児の子どもたちがこれまで遊んできた遊び、劇や水族館、お化け屋敷やお店やさんなどをつなげて「こどもの国」を実現しました。

そして三学期、家庭では小学校入学に向けて用品の準備もすすみ、「もうすぐ小学生」「早く一年生になりたい」という期待感と、「もつともつと幼稚園でいっぱい遊びたい」「もう一年、幼稚園にいたいかな?」という今への思いと、両方の気持ちを抱きながら、今という時間を惜しむように過ごしていました。

## D 夫君の紙芝居劇場

二月下旬のある日、コート室でA子とB子が紙芝居を読んでいます。この「紙芝居劇場」は隣の山の組のC子がきっかけでした。前日に保育者が読んだ紙芝居を読もうとしていたC子に気づいた山の組担任は、「もう少し読みやすいのがあるわよ」と保健室の紙芝居棚を知らせ、そこで出会ったA子、B子らとそれぞれに選り、読み合った後、場所を移して小さい組に読んであげることになりました。

私はその様子に気づき、「かみしばいを読むならD夫君も得意なんじゃない?」と同じ保健室にいたD夫に声をかけました。誘われて、紙芝居の棚を見にやってきたD夫にE子やA子が、あれこれと世話を焼いて選んだようでした。

翌日も紙芝居劇場は続きました。右手前方の立て看板には、「プログラム①かみしばい むかしばな

し おおきなだいこん」と書かれていました。最前列には四歳児、二列目には三歳児、五歳児も含めて大勢が集まつて席に着きました。

D夫が「おおきなだいこん」(ロシア民謡、川崎大治・作、教育画劇)を読み始めた途端に、昔話の世界にすつと引き込まれる感じがしました。抑えた声のトーンと「よいいしょ よいいしょ」のかけ声の軽快なりズムとのコントラストが効果的で、「おばあさんがおじいさんをつかまえた。たろうがおばあさんをつかまえた……」の繰り返しフレーズを調子よく読み進める間の取り方が絶妙です。どんどん早くなりそうなものですが、ゆったりとした早さを保ちます。「語り」と「呼びかけの言葉」「動物の鳴き声」など、声色も巧みに使い分けていました。紙芝居の読み手D夫を取り囲むように、F子、G子、H子、I子が立っていました。D夫が読むのを見守り、気持ち添わせてくれる一体感は、D夫

にとつて心地よいものだったでしょう。自然に役割を分担し、最初はF子がめくる係で、めくり忘れるとG子が、あるいは反対側のI子がすつと手を出します。紙芝居舞台を使い、めくったり戻したりするのは結構難しいものの、D夫はゆつたりと待ちます。聞き手も、D夫の読みっぷりがなかなかなので、めくるのに間があいても待てるようでした。

読み終わると同時に、「もう一回読んで!」という声がかかりました。中には「知ってるお話だからつまんなかった」という声もありましたが、舞台脇に下がりながら、D夫が満足そうに笑みを浮かべたのが印象的でした。そしてD夫は、次の出し物、女兒のダンスの曲に合わせて手拍子をし、一番前の座席に座り、年少児と会話しながら見ていました。

D夫は絵本を読むのが大好きで、園では絵本が置いてある保健室で過ごす時間も多く、帰宅後もよく絵本を読んでいるとのことでした。語彙が豊かで、

友だちの状況を巧みに代弁したり、上手に説明をし  
たりする姿が見られ、本を読むことを通して言葉を  
豊かに蓄えていると感じてはいました。けれども教  
師としては、小柄で体の動きがぎこちないことや友  
だちとかかわるのが苦手なことのほうが気になり、縄  
とびや鬼遊びに誘ったり、一緒に遊びながら動き方  
をアドバイスしたりすることを心がけていました。

三学期のこの時期、ほかの子どもが始めた「紙芝  
居劇場」という遊びを機に、D夫は、得意な力を存  
分に発揮して充実感を味わうことができました。私  
の心の中には、「今の時期にそれほどすらすらと字  
が読めなくても」という思いもありました。TTの  
教師が「D夫君はどうしてあんなに読めるの？」と  
尋ねると、「だってここに書いてあるじゃない」と、  
下欄の演出ノートにも目が向いていたらしいことが  
わかりびっくりもさせられました。とはいえ、すら  
すら読める技量ではなく、物語の世界を楽しむ豊か

な自分の世界をもっていることが、今回の経験につ  
ながったと感じます。

紙芝居の終盤、見ている子どもたちに「さあ、み  
なさんも いっしょに、よーいしょ……」と、呼び  
かける場面がありました。そこに「さん、はい」と  
いうアドリブを入れて、見ている子どもたちと「よ  
ーいしょ よいしょ……」と声を合わせる場面は本  
当に素敵でした。一人で絵本を読む時間の積み重ね  
のうえに、読み手として相手に伝える、友だちに  
サポートされる、見ている人と声を合わせる、幾つ  
かの心地よい体験が重なり、きつと自信につながっ  
たであろうと感じた遊びでした。

### 「J子のペーパーサート

三月中旬、卒業式まであと数日のある日、女兒数  
人が保育室で、自分たちが作ったペーパーサートで人  
形劇を始めました。このペーパーサートはだいぶ以前



▲ペープサート：魔女につかまり姫は牢屋に入れられた

に、作っただけで満足してしまっただけかしら？」と私は少し残念に思っていました。

王子様を作ったF子が「もうすぐ幼稚園が終わっちゃうから、早くやらなくちゃ」と突然言いだし、一緒にやることになったJ子らとついでてを出し、椅子を並べてすぐにも上演しようという勢いです。私を知る限り、ストーリーを友だち同士で考えていた様子も見受けられず、「えっ、突然始めて、人形

劇になるのかしら？」と不安に思いつつ見守っていました。

始まってみると、J子が中心人物になってストーリーを考えながら、声色を変えて話します。

ある日、魔女がやってきました。でもお姫様は、魔女を知らなかったのです。

魔女「こっちへ来てごらん」

牢屋にお姫様はつかまってしまいました。

お姫様「何でこうなるの」

魔女「おまえがだまされたからいけないんだよ」

お姫様「えっ、だまされた!」

魔女がけらいを呼びました。

魔女「姫が逃げないように見張っておくんだ!

(強い口調で) あっはっは(威嚇するように)「

けらい「はい。わかりました(おびえた感じで)「

お姫様「助けて! 助けて!」

そこに王子様がやってきました。

シャキーン シャキーン

王子「姫 大丈夫か？」

お姫様「大丈夫です。でも……」

魔女「何をするのじゃ！」

そこで魔女に見つかって、王子は魔女とたたかいました。今度は魔女がつかまってしまいました。

魔女「何でこうなるんだ！」

その後、お姫様はお城で幸せに暮らしました。

おしまい。

一回目が終わると、一緒にやっていたG子やF子から不満の声があがりました。「J子ちゃんばかり言うのずるい！」と。そう言われて二回目は、J子は一歩引いてウロウロしながら言いたいのを我慢して見守りました。やってみると、J子がセリフを言うようにはうまく進みませんでした。何となくJ

子が復活して三回目を演じました。

急な人形劇上演は、J子の牽引力に負うところも大きかったものの、J子のストーリー展開に合わせ、人形や城、牢屋などを動かす仲間がいるからこそペーパーサートが実現しています。結局、J子が中心で進んだものの、途中で不満を表明し、やりとりしたプロセスには、とても意味があったと感じました。同じクラスの子どもが最前列で食い入るように見ていたり、どちらかというと批判的なK夫が、「本物の人形劇みたいだったね」と声をかけていた姿もうれしいものでした。

幼稚園の一年間という生活サイクルの中で、三期の楽しさというのがあると改めて感じています。五歳児の三学期に、これまでの遊びとつなげて一生懸命遊んだ満足感、そこで得られた自信は、新たな生活に向けてのエネルギーにもなったと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)